



# 清流

立山町立立山中央小学校

令和5年9月

8月28日(月)に2学期がスタートし、およそ3週間が過ぎました。夏休みの「ChuOh! Fes!」や子供たちの見守り、2学期開始以降の校外学習の支援等、保護者や地域の方々の日々の応援とサポート、本当にありがとうございます。

夏の暑さが依然として残る中、学校では、グラウンドに暑さ指数測定器を設置し、子供たちが運動する際の目安が分かるようにしています。子供たちは、休み時間にグラウンドの暑さ指数を確認し「今日は遊べる」「あ～あ、今日はダメみたいだ」と一喜一憂しています。アクティブに身体を動かす中央っ子のパワーには頼もしさを感じます。

## “ありがとう”の言える子に！

先日、教職員に“ありがとう”の言える子供を育ててほしいという話をしました。ちょっとした相手の心遣いに“ありがとう(ございます)”の言葉が出ない子供が多いように感じるからです。もちろん、そうでない子供はたくさんいますが、「あれっ? “何も言わずに済みますの?”」と思う場面をよく見ます。

例えば「風で飛んでしまった袋を拾ってもらっても、ただ受け取るだけ」「〇〇先生に用があります」と言って呼び出してもらっても、呼び出してくれた方には目もくれず、用事を済まそうとする」など、何気ない場面に特に多いのです。

対応した方は「当たり前」のことで、謝辞を期待しているわけでもなく、特に不快に感じている様子はありません。しかし、対応してもらった側にとって、相手の心遣い等は「当たり前のこと」ではなく「有難いこと・感謝すべきこと」のはずです。相手が自分に対して心遣いをするのは「当たり前」と思ったまま大人になってもらっては、大変です。何気ない心遣いにちゃんと気付ける大人になってほしいと思っています。

しかし“ありがとう”となかなか言えない子供にも「何か大切な言葉、忘れていない?」や「こういう時は“ありがとう”って言うんだよ」と促せば、ちゃんと“ありがとう”と言えます。“ありがとう”を言わないのではなく「いつ・どんな時に、その言葉を使えばよいのか分かっていない」だけなのだと思います。

“ありがとう”の言える子供を育てるためには2つの経験の蓄積が大事です。子供は経験のないことはできません。経験しても蓄積されないと、身に付きません。

一つ目は子供が“ありがとう”と伝えた経験を増やすことです。子供に“ありがとう”というべき場面を大人がきちんと教え、その都度“ありがとう”と子供に言わせることが大事です。大人が代わりに言ってしまうと、子供の経験はいつまでたっても増えません。

もう一つは“ありがとう”と伝えてよかったという経験を増やすことです。言えたことに対する大人の「いいね」や、伝えた相手の嬉しそうな笑顔等が、子供のモチベーションを高めます。“ありがとう”が言えるのは当然ではありません。“ありがとう”と伝えようとする気持ちもとても「有難いこと」なのです。

学校は、保護者、地域の皆様と共に“ありがとう”と言える中央っ子の豊かな心を育てていきたいと思っています。皆様の温かいご理解とご協力、よろしくお願いいたします。